

ブルボンポワントゥの栽培の歴史

1714年	<p>ルイ14世がブルボン島でのコーヒー開発をフランス東インド会社に命令。 エチオピアが起源であるコーヒー品種アラビカ種ティピカが、イエメンを経由してブルボン島に紹介される。そして、そこで起きた突然変異種によって「ブルボンロンド」と「ブルボンポワントゥ」の二つの品種が誕生する。</p> <p>生産量の推移 1727年：50トン、1732年：400トン 1734年：500トン、1744年：3500トンまで増加</p>
1771年	<p>初めてポワントゥに関する記述が現れる『種は長めで、香りもエキスも豊かである。先端はかなり尖っており、ブルボンポワントゥの名にふさわしい』（サンルー地域を縦断したAUGUSTE BILLIARDの記述）</p>
1800年	<p>生産量が4000トンに、ピークを迎える。</p>
1806年	<p>サイクロンの大被害で3分の2のコーヒー樹を失う。</p> <p>生産量の推移 1815年：1305トン、1820年：1962トン、1826年：2400トン</p>
1829年	<p>再びサイクロンの被害で生産半減（その後も何度かサイクロンの被害を受け、コーヒー栽培は衰退の一途を辿る）</p> <p>生産量の推移 1855年：265トン</p>
1942年	<p>フランスのマルセイユに向けて200kgのポワントゥが積み出されたという記録が、事実上最後の記録となる。</p>

UCCブルボンポワントゥ再生プロジェクトのあゆみ

1999年	<p>様々な文献を元に、幻のコーヒーブルボンポワントゥを再生するため、レユニオン島を訪問。しかし限られた時間での調査は難航を極め、結局見つからず。調査をサポートしたレユニオン島の獣医アレン・ゴティエ氏にそのあとの調査を託す。帰国後、ゴティエ氏から30本ほど原木らしきものを発見したとの連絡がある。</p>
2000年	<p>レユニオン県庁農政局がコーヒー産業再開の可能性を調査するためジャマイカのUCCブルーマウンテンコーヒー直営農園を訪問。</p>
2001年	<p>レユニオン県庁がコーヒーの再開発を決議。</p>
2002年	<p>フランス本国がブルボンコーヒー再開発プロジェクトに開発援助を決定。フランス国立農業研究開発協力センター（CIRAD）、フランス国立研究開発センター（IRD）が技術的、科学的サポートを開始。共同プロジェクトに発展。試験農家に興味のある農家を募り、育種の実験を開始。ブルボンコーヒー生産者組合を設置。</p>
2007年	<p>再生プロジェクト開始後、初めての出荷。それをすべてUCCが購入し、製品化へ。</p>



レユニオン島について
マダガスカル島の東方約800kmのインド洋上に位置するレユニオン島はフランス共和国の海外県で、面積2,512平方キロメートル、人口72万人でコーヒーの原種のひとつブルボン種（原産地）です。県都はサン・ドゥニで、主要産物はサトウキビ、ラム酒等。観光産業も有望視され、リゾート開発も着手しています。

レユニオン島の歴史について
16世紀初頭、ポルトガルの航海者ペドロ・マナカレナスが当時無人のこの島を発見し、その後、17世紀半ばにフランスが領有権を主張。1662年にはこの島をブルボンと命名して最初の植民地を建設。1793年レユニオンと改称。1946年にフランスの海外県となり、1974年に行政権が与えられました。